



「御領名所図巻」より木崎野の野取の図（もりおか歴史文化館蔵）

藩政時代、盛岡藩は全国有数の馬産地だった。特に藩北部、現在の上北郡から三戸郡にかけての地域が名馬の産地であり、この地を中心に「南部九牧」と称される九つの藩営牧場（藩牧）が置かれていた。なかでも最大の牧は木崎野（現三沢市）おいらせ町周辺）で、年代により変遷はあるが、幕末期で4〜500頭の馬が飼われていた。

木崎野は地元の豪族であった小比類巻家が代々管理人（野守）を務め、配下に名子と呼ばれる隷属農民を従えて経営を行っていた。名子の数は、1829（文政12）年の時点で60軒余もあった。名子だけではなく、周辺の農民も様々な負担が課せられていた。当時の三沢市周辺は人口が希薄だったため、遠隔地の村まで及ぶことがあった。

幕末期、三本木平（現十和田市ほか）開発をしたことで知られる盛岡藩士新渡戸伝の息子、新渡戸十次郎は、藩牧に対する民衆の負担を指摘し、藩牧不要論を述べている（『御国益考』『青森県史資料編近世6』収録）。  
①牧を囲む柵の修繕や、野取（秋に馬を集めるため捕獲すること）、干し草刈などは名子だけではできないため、村の生産高に応じて人夫を供出させている。さらに西根通（現岩手県東八幡平市周辺）の百姓まで動員しているが、遠隔地のため人夫賃を代納してい

る。それが一人あたり何貫文もかかる。

②藩牧の馬は、晩秋から食糧が不足するので、柵を破り、奥入瀬川流域から西根山までの作物を食い荒らしている。数十ヶ村の百姓は昼夜問わず見廻りをし、その労苦は尋常でない。作物被害はもちろん、人件費も膨大である。

③野取の際は藩の役人や馬医が立ち会い、随行員も

### 盛岡藩牧と

### 民衆負担

### 中野渡 一耕

（元青森県史編さん  
調査研究員）

多い。村の幹部も数日間同行するので、諸費用はすべて村々に賦課され、負担が膨大である。

その他、三戸からの馬医派遣や、盛岡へ藩用馬運搬の経費などの諸点が挙げられており、全体とすると、民衆の負担は藩牧に係る労役や人夫賃、藩の役人への金銭的・人的対応、さらに逃亡した馬の農作物被害などに分けられる。

木崎野の場合、さらに1755（宝暦5）年までは、冬期間、周辺百姓が屋内飼育する義務があったが、百姓の負担を軽減するため通年放牧となった。それでもこのような負担が残っていたのである。たとえば野取は、1809（文化6）年頃には年間のべ425名が動員されていた。

十次郎は「このような種々の負担をまとめると年間で膨大な額になる、かつては牧周辺には荒野が広がっていただろうが、現在では開発が進み牧の存在が農業の支障になつている」と述べる。三本木平開発が進むと牧の場所にも接触し、市川浜のイワシ漁業や、小川原湖の内水面漁業など総合的開発を目指す十次郎にとっては、牧は邪魔な存在だった。

藩牧はもともと藩用馬の育成が主目的だが、多額の費用を掛けて維持するにうのが十次郎の主張である。彼は三本木で新たに馬市を開くなど、産物としての馬は重視していたが、藩牧の維持は無駄なシステム

と認識していたのである。実際、周辺の藩、弘前藩や八戸藩では藩牧は19世紀前半に廃止されている。その代わりに、藩用馬として優秀な民間の馬を買い上げる方法に代わった。盛岡藩でも藩牧廃止を唱える者がいたが、十次郎言うところの抵抗勢力により、1855（安政2）年頃に住谷野・相内野を休牧にした以外

は廃藩期まで維持されることになった。ただし、1865（慶応元）年には三本木平開発の動きに対応したのか、木崎野は一部の場所を新田開発せざるを得なくなった。

さらに、1869（明治2）年7月には木崎野の南側の部分は廃止になり、開発を希望する者に払い下げられることになった。そして、1871（明治4）年7月の廃藩置県で、木崎野はその役割を終える。その跡には我が国最初の西洋式牧場としての広沢牧場が開設されるが、軍馬の育成は木崎野ではなく、三本木平周辺に置かれた陸軍軍馬補充部に引き継がれていくのである。